

1816年の琉球人の生活を描いた新史料発見！  
バジル・ホール一行の知られざる貴重資料を公開！

2015 **11 21** 土  
於沖縄キリスト教学院大学

『クリフォード訪琉日記～もうひとつの開国～』出版記念講演会

# 大英帝国と 琉球の出会い

イギリス海軍の将校が1816年の琉球を描いた新史料。200年間忘れられていたこの貴重な史料を、沖縄キリスト教学院大学・浜川仁教授が発見・翻訳、そして緊急出版。その歴史的価値と、そこから見えてくる琉球の姿について講演。  
**講演会で公開される更に新たな史料は必見！**

日時 2015年11月21日(土)  
13:30 開場  
14:00 スタート  
16:00 閉会(予定)  
会場 沖縄キリスト教学院大学  
シャローム会館 1-1  
定員 先着80名  
参加費 無料  
主催 不二出版  
共催 バジル・ホール研究会



お問合せは  
バジル・ホール研究会まで

TEL : 098-867-1300  
メール : basil-hall@nansei-m.co.jp

# 日本近代化の先駆けとなったキーパーソン、H・J・クリフォード

本書「まえがき」より

まず、この日記の著者のクリフォードとは、どのような人物なのか。

フルネームをH・J・クリフォードという。アイルランド生まれのイギリス人で、一八一六年九月一五日頃から一〇月二七日までのあいだ、英国海軍大尉として琉球を訪問している。当時、中国の曆を使用していた琉球側の記録によれば、嘉慶二十一年七月二四日から、同年九月七日までの出来事となっている。

クリフォードの乗っていた英艦ライラ号は、中国との交易システム改善を目指したアマースト使節団を、天津を通り渤海湾に注ぎ込む海河（白河）の河口近くまで送り届けたのち、使節団が公務を終えるまでの間、マレー・マクスウェル艦長率いるアルセスト号とともに、それまでよく知られていなかった東シナ海の海域を探索していたところ、琉球にも立ち寄ることになった。

この訪問のようすは、ライラ号の艦長バジル・ホールによつて、『朝鮮・琉球航海記』（春名徹訳）の中、人間味あふれるタッチで描きだされている。一八一八年に出版されると、またたくまにベストセラーとなり、数カ国語に翻訳され、「琉球」(Loo-Choo)の存在を西洋世界に広く知らしめることになった。クリフォードは、そのホール艦長の親友であったといえ、分かりやすいだろうか。

だが、クリフォードは、琉球近代史の中で、独自にふたつの役重要な割を演じているのである。

まず、琉球訪問のあいだ、語彙の収集に情熱を傾け、王府役人や一般の人たちときかんに交流を行った。じじつ、ホールの『朝鮮・琉球航海記』の初版には、クリフォードの「琉球語彙（ごい）」が数十ページにもわたる付録として掲載されていた。

四〇日あまりに過ぎない滞在だったから、その学術水準に多少の疑問はあるとしても、彼の語彙集はアルファベットによるまとまった琉球語資料としては貴重なもので、かなりの信頼をよせる研究者もいる。

また、クリフォードの琉球へ情熱は、言語学的関心に留まらなかった。『朝鮮・琉球航海記』を執筆する際、クリフォードの知見におおきく助けられたことを、著者のホール自身が述べているからだ。

序文において、ホールは「クリフォード海軍大尉のノートから多大の恩恵をこうむった」、「航海中の多くの出来事のうち、私が職務上の忙しさのために観察したり書きとめたりすることができなかった部分記録にとどめることができたのは、ひとえに同君のおかげである」（春名訳）と明記している。

さらに、クリフォードの歴史的役割において、私たちが注目する理由はもうひとつあつて、それは、彼がイギリス帰国後に海軍将校たちをスポンサーに一般の寄付をつのり、ほとんど独力で「英国海軍琉球伝道会」を創設したからである。（中略）

その経緯は、照屋善彦著『英宣教医ベッテルハイム』（山口栄鉄・新川右好訳）に詳しいが、

要するに、このクリフォードこそが、日本初のプロテスタント系宣教師・ベッテルハイムを沖縄に送り込んだ最大の仕掛け人であった。

『クリフォード訪琉日記』は、ホールが参考にしたという「ノート」と同一であるとは断定できないが、九月二日に始まり一〇月二七日で終わっているから、来琉一週間目くらいに始まり出発の日が終わる、三〇日以上にわたる記録となっている。

山口栄鉄著「クリフォード——琉球伝道史上の「先覚」（『新沖繩文学』第三七号、一九七七年十二月）によれば、クリフォードの手になる「数巻に及ぶ日誌稿本」が二〇世紀の始め頃まで、子孫に受け継がれていたはずだといふ。ここで山口氏の言及する「幻の訪琉記」稿本のひとつが、まさにこの『クリフォード訪琉日記』ではないだろうか。（中略）

一八一六年の琉球訪問については、幸いなことに、バジル・ホールの『朝鮮・琉球航海記』をはじめとして、アルセスト号の船医J・マクロードの著した『アルセスト号 朝鮮・琉球航海記』（大浜信泉訳、真栄平房昭解説）といった、優れたトラベルライティングに恵まれているが、ずっと親しまれてきたこのラインアップに、いま『クリフォード訪琉日記』が加わることになった。

我が国が激動の近現代に突入する先駆けとなったのは、まさに一八一六年の英国海軍の琉球訪問であり、この歴史のうねりの中のキーパーソンのひとり、H・J・クリフォード、その人なのである。